異言語研究と実践語彙教育：「容器メタファー」に見る認知言語学導入の研究意義
― スペイン語・英語・韓国語・日本語を通して ―

福森 雅史

1.0. はじめに

従来の理論言語学のアプローチでは、例えばChomsky（1957）に代表されるように、人間には本来的に言葉を生成する文法能力が備わっており、言語活動はこの能力の現れに他ならないという、言語の創造性に着目した立場を執るものであった。そして、文を生み出す装置としての文法は「恣意的」（arbitrario）なものではなく「規則的」（regular）なものであると考えられていた。それ故、繰り返し適用される基本的規則の拡充に注目すれば、従来の理論言語学における言語観は文法を普遍的な規則の集合体として体系づけることが可能であるという統語理論中心の世界に収束する。また、その世界は我々人間とは切り離された客観的な真実に基づいた世界である、という考え方でもある。したがって、言語もまた、知覚経験から独立した形式と意味との関係からなる客観的記号の体系に過ぎないという言語観が主流を占めてきたことは周知の事実であろう。このような見解に対し、以下（1）では客観主義とも浪漫主義とも異なる「経験主義」という第三の立場からの言語アプローチが伺える：

（1） We are physical beings, bounded and set off from the rest of the world by the surface of our skins, and we experience the rest of the world as outside us. Each of us is a container, with a bounding surface and an in-out orientation.
（我々は生身の肉体を持った存在であり、自身の皮膚の表面によって外部世界と接し、区切られ、そして自身の肉体内部以外の世界を外にある世界として経験している。一人ひとりの人間が皮膚を境にして、肉体の内／外の方向性を持つ、容器である。） ― Lakoff and Johnson（1980：29）（下線・日本語訳筆者）

つまり、「我々は生身の肉体を持った存在であり、自身の皮膚の表面によって外界世界と接し、区切られ、そして自身の肉体以外の世界を外にある世界として経験している」以上、その経験を通して得られた認識が言語に反映されているからこそ、「概念的意味」（以

下、これを「概念」と呼ぶ）が生じ得ると言える。このように、「言語とは人間の大脳活動の結果事象である」とする経験主義的立場を執るアプローチ法こそが「認知言語学」(Lingüística Cognitiva）である。そして、認知言語学におけるこうした言語観は、例えば、下記（2）のアリストテレス哲学に示されるような哲学的見地とも直結することになる：

（2） … 直接に経験される世界は混沌とした印象・表象の世界である。われわれの思考はこの世界のうちに秩序をみつけだす。その思考内容は言葉によって表現され形を与えられる。だから、事物と言葉とは不可分である。逆に、当該の事物について語られる言語の結合を分析しさえすれば、事物の知に到達することができよう。つまり、経験材料である事物→思考→言語→事物の知のように、認識は円環的に考えられよう。アリストテレスはこのように考え、プラトンが立言形式と関係のないイデアという実在を認めたのとはちがって、どんな表現されない実在も認めなかった。

— 堀田（1991：121）（下線筆者）

つまり、外界の事物と言葉とは不可分であり、人間の認識は「経験材料である事物→思考→言語→事物の知」として捉えられるが、言うまでもなく、我々の誰しもが自身の認識体系としてこの「知覚－言語－人知」の密接な結びつきを保持している。それ故、自身の生身の肉体や知覚器官を通して繰り返し得た「経験」を基盤にした知のメカニズムをスペイン語教育に導入することは、第二言語学習者にとっては自身の馴染み深い日常経験と重なった自然な言語習得となり得ることは言を俟たない。このことを含意する記載が次の（3）である：

（3） Yet the influence of cognitive linguistics may prove very valuable, because it lends theoretical support to a number of accepted teaching approaches in the fields of both vocabulary and grammar.

（けれども、認知言語学の影響は非常に価値のあるものであることが証明されるかもしれない。なぜなら、認知言語学は、語彙、文法の両面で多くの受け容れられてきた教授法を理論的に支えるからである。）

— Ungerer and Schmid（1996：267）（下線・日本語訳筆者）

しかしながら、実際のスペイン語語彙学習指導の現状に目を向ければ、認知言語学の諸

理論に基づいた種々の研究成果が第二言語習得に効果的かつ体系的に帰納されているかと言えば、(特に 'what to teach' (qué enseñar) の側面において) その限りではないように感じられる。例えば、以下 (4) に見られるように、

(4) 認知情報処理のシステムをできる限り調べ、その働きにあった教授・学習方法を導入することで、外国語習得を支援していくしか有効な選択肢はない。具体的な方法としては、加齢によってもあまり退化しない条件づけを用いたり、反復練習を重要視したり、短期記憶に負担をかけないよう配慮をしたり、注意資源の適正配分を心がけたり、音声化や自動的処理のメカニズムを利用したり、あるいは、スキーマの活性化を促進したり、などが考えられる。

— 竹内 (編) (2000 : 140) (下線筆者)

現状では、「条件づけ」や「反復練習」といった 'how to teach' (cómo enseñar) の側面には多分に光が当てられている反面、'what to teach' (qué enseñar) という側面には「意味概念」を生み出す大脳内活動 (以下「認知メカニズム」と呼ぶ) を明らかにして言語教育の向上に還元する視点は乏しいように感じられる。また、第二言語の四技能 (leer, escribir, hablar y oír) を育成するためには、通常、言語における最小単位となる「語」(cf. 上野 (1955 : 1)) の意味を論理的に学習指導することが必要であると考えられるが、この語彙概念の学習指導という点では、「スペイン語表現 = 日本語訳」の形で機械的に覚えていくことが正しい単語習得の方法であるというような学習指導が主流を占めているように感じられてならない。下記 (5 a - b) がその実例である :

(5) a. **emplear** [エン・プれ・**ア**ル] 他 使う, 用いる ; 雇う [⇔ despedir]

Comunica ideas *empleando* palabras simples. 彼は易しい単語を用いて考えを伝える.

— 高橋 (2006 : 90)

b. **cargar** [カル・**ガ**ル] [活 pagar] 他 ①背負う ; [負担を] 負わせる

Cargué el saco al hombro. 私は袋を肩に背負った.

Me *cargaron* la culpa. 彼らは私に罪を着せた.

② [+ con・de 荷を] …に積み込む :

Cargamos el camión con medicinas. 私たちはトラックに医薬品を積み込む

— 高橋 (2006 : 41)

そして、筆者の経験も交えると、このような（日本語訳の機械的）詰め込み式学習が偏重されている学習指導法には次の（6a - c）のような問題点が存在する：

（6） a.「日本語訳の機械的な丸暗記が得意な人ほどスペイン語が得意である」ということになってしまう。これは、裏を返せば、「日本語訳の機械的な丸暗記が苦手な学習者にとって大きな問題である」ということである。

b. 暗記力に自信を持っている人たちでさえ、しばらく時が経てば、丸暗記をしていた単語やその日本語訳を忘れてしまう。

c. 特に、一つの単語が複数の異なる日本語訳を有している多義語の場合、その日本語訳の数に応じて記憶の負担は比例して大きくなる。

こうした問題点を解決するためには、まず、'how to teach'（cómo enseñar）の側面ばかりでなく、「学習者が具体的な学習対象そのものを如何にして捉えるべきか？」といった 'what to teach'（qué enseñar）の側面にも光を当てることが必要である。また、以下（5）の下線部に示されるように、

（5） 母語獲得の強力なメカニズムである言語獲得装置は、脳が可塑性を持つために年齢とともにその機能を退化させていき、別の目的に再利用されていく可能性が高い。そのため、成人の外国語習得に際しては、生得的な言語獲得装置を十分に利用することができないと考えるべきであろう。

— 竹内（編）（2000：140）（下線筆者）

大脳内に存在する言語獲得装置の生得的な側面にのみ着目するばかりではなく、母語話者が自身の経験を基に語の「概念」を如何にして習得しているのかというメカニズムを明らかにし、その言語獲得装置の後天的な側面を活用することが不可欠ではないかと考えられる。こうした考えを第二言語の具体的な学習指導に反映させ得る手段の一つが、種々の上位概念に基づいた「カテゴリー化」（categorización）であると考える。そこで、以下では、「容器」概念をその一例として活用することで、スペイン語学習者の自身の生身の肉体や知覚器官を通して繰り返し得た「日常経験」に自然に即した新しい学習指導内容の一端を明示する。

2.0. 「容器メタファー」(metáforas de recipiente) と種々の「雇用／解雇」表現との概念的つながり

2.1. 「解雇」表現のカテゴリー化

まず、以下（1）に注目する：

（1） [+ de　義務・責任などを] …から免除する：

Te *descargo de* la deuda.　君の借金を帳消しにしてやろう.

～ a un ministro *de* las funciones　大臣の職務を解く.

—『現代スペイン語辞典』(s.v. descargar, *trans.* ❷)（下線筆者）

上記（1）の下線部に見られる「職務を解く」とは、次の（2）に示されるように、「解雇」表現の一種であることは言を俟たない：

（2） 職をやめさせる。免ずる。「任を— - く」

—『広辞苑』(s.v. と - く【解く】㊀【他五】❸)（下線筆者）

この descargar は「反対」(cf.『現代スペイン語辞典』(s.v. des-《接頭辞》)) の意を示す派生形態素 des- と「…に荷を積む」(cf.『現代スペイン語辞典』(s.v. cargar, *trans.* ❶)) を意味する自由形態素 cargar から成り立つ語である。このことを以下（3）として表記する：

（3） descargar < des- + cargar

しかしながら、des- と cargar との双方の単純な表層的意味の加算だけでは「解雇する」の意に成り得ない。そのため、descargar の意味を従来の語形成の観点からだけでは捉えることができず、結局はその意味を cargar とは別個に丸暗記しなければならない不経済性も生じる。

この問題を解決するためには、cargar の中核概念に通時的見地から光を当てる必要があると考えられる。そこで、次に、下記（4）に注目する：

（4） **CARGAR**, del lat. vg. CARRĪCARE íd., derivado de CARRUS 'carro', voz latina de origin céltico. ... *Carricare* se halla ya en la *Lex Visigothorum* y en otros textos

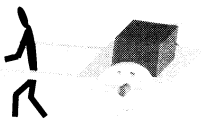
de la época visigótica y merovingia, en el sentido de 'acarrear, llevar', y en una inscripción Latina de África (CIL VII) en el sentido de 'cargar'...

(**CARGAR**,「荷車」を意味するケルト語起源のラテン語 CARRUS の派生語である俗ラテン語 CARRÎCARE から。… *Carricare* は、既に、「(車などで) 運ぶ、運搬する」の意で、*Lex Visigothorum* や西ゴートの時代の他のテクストに、また、「…に荷を積む」の意でアフリカのラテン語の碑文に見られる …)

— *Corominas* (s.v. cargar) (一部省略・下線・日本語訳筆者)

ここから cargar は、「荷車」を意味する carrus に由来し、初出期には「(車などで) 運ぶ、運搬する」及び「…に荷を積む」の意を表示していたことが伺える。そのため、cargar の原義は次の (5) であると考えられる：

(5) cargar の原義：「荷車に荷を積んで運ぶ」



そして、現在の cargar は複数の意味を有する多義語である (cf.『現代スペイン語辞典』(s.v. cargar)) が、一方向仮説 (hipótesis de la unidireccionalidad) の流れに沿った捉え方に基づくと、cargar の意味変化の流れの源流はやはり、上記 (5) に示した原義「荷車に荷を積んで運ぶ」という物理的事象に遡ることになる。最も原初的な「荷車」は、以下 (6) に示されるような板に車輪と持ち手を加えただけの簡素なものだったと考えられる：

(6)

そして、我々の日常経験を振り返れば、荷を積むための車がない場合、人間はそれを「背に乗せて」運搬する活動を行なうのは今も昔も変わらない。こうした日常経験から、cargar は次の (7) に見られる「荷を背負わせる → 負わせる」というイメージを獲得したと考えられる：

(7) José *cargó* un saco a las espaldas. (ホセは袋を背負った)

そして、このイメージを動機づけとして、cargar の更なる意味変化のプロセスが引き起こされたと考えられる。以上の論述から、cargar の多義性のメカニズムは以下 (8) の形で

学習者に提示することが可能となる：

（8） 荷車に荷を積んで運ぶ ⟶ 荷を背負わせる

負わせる
- （任務を負わせる） ⟶ 責任を委ねる
  - 例：Le *cargaron* con el trabajo.
    （彼はその仕事を負わされた→押し付けられた）
- （罪・失敗の原因を負わせる） ⟶ 罪を着せる；責任を負わせる
  - 例：Le *cargaron* la culpa de robo.
    （彼は窃盗の罪を負わされた→着せられた）
  - 例：Me *cargaron* las culpas del fracaso.
    （私はその失敗の責任を負わされた）
- （経済的負担を負わせる） ⟶ 課す；（料金などを）上乗せする
  - 例：El gobierno ha decidido *cargar* las importaciones en un cinco por ciento.
    （政府は輸入品に5%の関税を負わせること→課することを決定した）
  - 例：Manuel lo *ha cargado* 20 euros por gastos de envio.
    （マヌエルは送料としてそれに20ユーロを負わせた→上乗せした）

また、「荷を背負わせる」と、「その荷の重さに苦しみ、耐えられなくなる」という事柄を経験している。そこから、下記（9）に見られる「荷を背負わせる → 耐えられなくする」という意味拡張が引き起こされたと考えられる：

（9） Me *carga* su interminable charla.
（彼女の長話は私を耐えられなくする → 私は彼女の長話にうんざりだ）

ここで、cargar の更なる意味変化のプロセスの解明に大きな効力を発揮するのが、以下（10）に示す「容器のメタファー（metáforas de recipiente）」という比喩のフィルターである：

（10） We are physical beings, bounded and set off from the rest of the world by the surface of our skins, and we experience the rest of the world as outside us. Each of us is a container, with a bounding surface and an in-out orientation. We

project our own in-out orientation onto other physical objects that are bounded by surfaces. Thus we also view them as containers with an inside and an outside. Rooms and houses are obvious containers. Moving from room to room is moving from one container to another, that is, moving *out of* one room and *into* another. ... But even where there is no natural physical boundary that can be viewed as defining a container, we impose boundaries — marking off territory so that it has an inside and a bounding surface — whether a wall, a fence, or an abstract line or plane.

（我々人間は物理的存在であり、その肉体は皮膚の表面によって外界から区切られている。そして、自分の肉体以外の世界を我々の外にある世界として経験している。一人ひとりの肉体がそれぞれ、外界と境界を接する表面と、内と外という方向性を持つ、一つの容器なのである。我々は自分自身が持っている内と外という方向性を、表面という境界面を持っている他の物理的物体にも投射して考える。だから、それらの物体もまた内側と外側を持った容器であると我々は見なしているのである。部屋や家は明らかに容器である。部屋から部屋への移動は、或る容器から他の容器への移動ということになる。つまり、或る部屋から外に（*out of*）出て、他の部屋の中へ（*into*）入るということである。… しかしながら、一つの容器としてはっきりみなせるような自然の物理的境界が存在しないような所にも、我々は境界を設ける。内側と境界面 — それが壁であれ生け垣であれ、あるいは抽象的な線や面であれ — を持つような領域を作り出すのである。）　— Lakoff and Johnson（1980：29）（一部省略・日本語訳筆者）

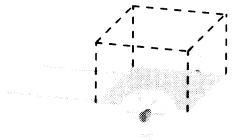
そして、Lakoff and Johnson（1980）では、例えば、次の（11）を挙げ、

（11）　There's a lot of land *in* Kansas.（カンザス州の中に土地がたくさんある）
— Lakoff and Johnson（1980：30）（日本語訳筆者）

一つの容器（recipiente）として視覚で捉えられるような自然の物理的境界が存在しないところにおいても、我々は「存在のメタファー（Metáforas ontológicas）」を通して境界を設けるような知的営みを行なっていることが述べられている。このように、我々は「自然の物理的境界が存在しないような所にも境界を設ける」ことができることから、下記

(12) に示されるように、荷車の荷台も一つの容器として見なすことが可能となる：

(12)



また、以下 (13) に示されるように、荷車に積荷落下防止のための囲いをつければ、その容器性は一層明確になる：

(13)

つまり、上記 (10) で観察した「容器のメタファー (metáforas de recipiente)」という比喩のフィルターを通すことで、一層の多義性が生じるに至ったと考えられる。以上の論述から、cargar の多義性のメカニズムは次の (14) の形で学習者に提示することが可能となる：

(14) 荷車に荷を積んで運ぶ ——— [「容器」のメタファー]

→ (容器の中に内容物を入れる) ——→ 容量がある

例：Este ascensor *carga* diez personas.

(このエレベーターは10人を積みこむ → このエレベーターの定員は10人である)

→ 内容物で容器を満たす

例：*He cargado* la sopa de sal.

(私は塩でスープを満たした → 私はスープに塩を入れすぎた)

→ (銃・大砲の中に) 弾・火薬を入れる

例：La policía *cargó* la pistola para disparar a el asesino.

(警官は犯人に発砲するために拳銃を (弾で) 満たした → 拳銃に弾を込めた)

→ (カメラに) フィルムを入れる

例：*He cargado* una máquina fotográfica.

(私はカメラを (フィルムで) 満たした → カメラにフィルムを入れた)

→ (蓄電池に電気を入れる) ——→ (電荷を蓄える) ——→ 充電する

例：Emilio *cargó* una batería.

(エミリオはバッテリーを (電気で) 満たした → バッテリーを充電した)

→ (ストーブに薪・石炭を入れる) ——→ (燃料を) 補給する・補充する

例：Mi padre *cargó* una estuga de leña.

(父は薪でストーブを満たした → ストーブに薪をくべた)

ここで、上出（3）（以下、（15）として再掲）で見たdescargarがなぜ「解雇」の意を示し得るかが明らかになる：

（15） descargar < des- + cargar

我々は通常、「日々の生計を立てる」という目的のため、報酬や賃金という利益を求めて会社などの組織に属し、そこで労働を行なっている。そのため、被雇用者は自身が所属する組織や団体の「内部」に生業を求めているのであり、雇用契約を一方的に解除されて生計を立てるための手段を失ってしまうことを自ら望んではいない。このような日常経験が背景にあって、「「容器」の内部への移動」概念を表示するcargarと「反対」概念を表示する接頭辞des-との加算として表されるdescargarは、被雇用者本人の意思に反して、「容器」である所属組織の「外部に放出する」概念が反映され、「解雇」の意を表すに至るのである。このことを以下（16）として整理する：

（16） des-（反対） + cargar（「容器内部への移動」概念）
→（被雇用者本人の意思に反し、「容器」である所属組織の外部に「放出」する）
→（人を）解雇する

このdescargarに見られる「放出」概念を用いれば、「解雇」表現の一つであるdestituirも同様のカテゴリー化を図ることが可能となる。

このdestituirは、下記（17）に示されるように、ラテン語dēstituereに由来し、

（17）destituir（dēstituere）
—『ロマンス語語源辞典』（「スペイン語語源語表」p. 32）

更に、以下（18）に見られるように、

（18） わきへ置く，（人を）他から離して立たせる，独り立たせる．
—『羅和辞典』（s.v. dēstituō, ere, situī, stitūtum, *v.a.*, 1）

「わきへ置く，（人を）他から離して立たせる」の意を表していた。また、このdēstituere

は、語形成の観点からは、次の（19）として表せることから、

（19） dēstituere ＜ dēs-（反対） ＋ stitu-（＜ st- 立つ → 置く） ＋ -ere（動詞化語尾）

destituir（＜ dēstituere）の原義は下記（20）として表すことができる：

（20） destituir の原義：「他から離して〔des-〕置く〔st-〕」

この原義から「解雇」の意を表すに至る destituir の意味変化のプロセスも、既に観察した descargar と同様に、「容器のメタファー（metáforas de recipiente）」を用いて学習者に明示することが可能となる：

（21） （他から離して〔des-〕置く〔st-〕）→（人を「容器」である所属組織の外部に「放出」し、その所属組織から離して置く）→（人を）解雇する

このように、「対象者の意思に抗して、その対象者を（「所属組織」という）「容器」の内部から外部に移動させる」概念が「解雇」の意を生じさせていることになる。この概念化を推し進めれば、以下（22 a － e）に示されるように、「所属組織」という「容器」からの「放出」の仕方に焦点を当てた表現のいずれもが単一の概念的観点から学習指導することが可能となる：

（22） a. **empujar：押す**

例：Le *empujaron* del ministro.

（彼は大臣の地位から押された → 大臣の地位を追われた）

b. **echar ／ arrojar：投げる**

例：Me { *echaron* / *arrojaron* } de la fábrica.

（私はその工場から投げられた → その工場を辞めさせられた）

c. **dar la patada：蹴り飛ばす**

例：Me *dieron* la patada.

（私は（その会社から）蹴り飛ばされた → 首になった）

2.2. 「雇用」表現のカテゴリー化

他方、「雇用」の意を表すemplearの意味変化のプロセスも、同様の「容器のメタファー（metáforas de recipiente）」という単一の認識で学習者に捉えさせることが可能となる。このemplearの通時的観点に目を向けると、下記（1）から、その原義は「（布などで）その内部〔em-〕に包み込む〔ple-〕」であることが伺える：

（1） **EMPLEAR**, tomado del fr. arcaico *empleiier* (hoy *employer*) íd., procedente del lat. ĬMPLĬCARE 'envolver, complicar', 'meter (a alguien en alguna actividad), dedicarle (a ella)', derivado de PLĬCARE 'plegar, doblar'.

（**EMPLEAR**,「折り畳む、折り曲げる」を意味するPLĬCAREの派生語で、「包む、巻き込む」、「（ある活動に人を）置く、（人に）献身する」を意味するラテン語ĬMPLĬCAREから生じたフランス古語*empleiier*（今日では*employer*）から借用された。） — *Corominas*（s.v. emplear）（下線・日本語訳筆者）

つまり、「雇用」事象は「「容器」の内部への包含」という「解雇」事象とは真逆の概念で捉えられることになる。これを以下に（2）として記す：

（2） emplear：「「容器」の内部への包含」概念

つまり、「雇用」事象を表すemplearの意味変化のプロセスに関しても、これまでと同様に「容器のメタファー（metáforas de recipiente）」を用いて学習者に明示することが可能となる。これを以下（3）として整理する：

（3） emplearの原義：「（布などで）その内部〔em-〕に包み込む〔ple-〕」
→（被雇用者本人の求めに応じ、「容器」である所属組織の内部に「包含」する）
→（人を）雇用する

2.3. 異言語における「解雇」表現の共通概念

言語（表現）という「容器」そのものは相異なっていても、それを使用するのは「人間」という同じ生物であり、自身の生身の肉体や知覚器官を通して繰り返し得た経験こそが「人間の本質の産物」に他ならないことから、そこには「共通のものの見方」が存在す

ると考えられる。下記（1）がその詳細である：

（1） Each such domain[= a basic domain of experience] is a structured whole within our experience that is conceptualized as what we have called an *experiential gestalt*. Such gestalts are *experientially basic* because they characterize structured wholes within recurrent human experiences. They represent coherent organizations of our experiences in terms of natural dimensions (parts, stages, causes, etc.). Domains of experience that are organized as gestalts in terms of such natural dimensions seem to us to be *natural kinds of experience*.

They are *natural* in the following sense: These kinds of experiences are a product of

Our bodies (perceptual and motor apparatus, mental capacities, emotional makeup, etc.)

Our interactions with our physical environment (moving, manipulating objects, eating, etc.)

Our interactions with other people within our culture (in terms of social, political, economic, and religious institutions)

In other words, these "natural" kinds of experience *are products of human nature*. Some may be universal, while others will vary from culture to culture.

（そのような各々の領域［＝基本的領域の経験］は我々の経験の内部で構造化される全体であり、今まで述べてきた「経験のゲシュタルト」として概念化されるものである。そのようなゲシュタルトは、繰り返された人間の経験内部で構造化された全体を特徴付けることから、「経験的に基本的なもの」である。それらは、自然な相（例えば、部分、段階、因果関係など）の観点から、我々の経験を一貫して組織化することを示している。そのような自然な相の観点からゲシュタルトとして組織化される経験の相は我々にとって「自然な種類の経験」のように思われる。

それらは以下の意味において「自然」である：この種の経験は以下のものから生じる。

我々の肉体（知覚的及び運動神経器官、知的能力、感情の気質等）

物理的環境との相互作用（移動、物体の操作、食行為等）

（社会的、政治的、経済的、そして宗教的状況内の観点からの）同一文化内における他の人々との相互作用

換言すれば、これらの「自然な」種類の経験は「人間の本質の産物」なのである。それらの経験の或るものは普遍的かもしれない一方、他のものは文化によって異なる場合もあるかもしれない。）

— Lakoff and Johnson（1980：117-118）（下線・[ ]内表記・日本語訳筆者）

こうした「自然な種類の経験」から得られる「共通のものの見方」が存在するという考えに基づけば、次の（2）に示されるように、英語母語話者の無意識的意識においても同様の概念化が成され得ることは言を俟たない：

（2） a. employ：（人を布で包み込む）→ 人を雇い入れる（⇨人を雇う）
b. dismiss：（人を部屋から退出させる）→ 人を退社させる
c. discharge：（大砲から弾丸を発射する）→ 人を放出する
（⇨人を解雇する）
d. fire：（大砲から弾丸を発射する）（⇨ fire（人の首を切る））

— 上野・森山（2004：11）

他方、日本語の「首を切る／首にする」という表現は、これまでとは異なる概念で捉える必要がある。その捉え方を明らかにする鍵となる実例が以下（3a − b）である：

（3） a. 頭数を数えると、このクラスには40人の生徒がいた。
b. En el reparto tocaron a viente euros { por *cabeza* / per *cápita* }.
（彼らの分け前は一人頭（あたま）20ユーロだった）

上記（3a − b）に見られるように、我々は人間の体全体（= base）を指すために、その一部である「頭」に焦点を当て（= perfil）て表すことがある。「（従業員の）頭数を減らす」ことは「従業員を解雇する」ことと意味概念的に等価であることから、「頭数を減らす」ためには「首を切る」とよいことになる。つまり、「頭数」という言い方は「部分（= 頭）と全体（= 体）」の認識から生じたメトニミー（metonimia）表現である。なお、同様の概念化は、異言語である韓国語においても観察される。下記（4）−（6）がその実例

である：

（4） A 은행은　3000 명에　달하는　계약사원의　목을　뗐다.

A 銀行は　3000 名に　及ぶ　契約社員の　**首を　取った**

（A 銀行は 3000 名に及ぶ派遣社員の首を切った。）

（5） 사장은　직무　태만이라는　이유로　과장의　목을　잘랐다.

社長は　職務　怠慢という　理由で　課長の　**首を　切った**。

（社長は職務怠慢という理由で課長を首にした。）

（6） 당신같이　유능한　사람의　목이　날아가게　되다니　우리　회사도　이젠　끝이군.

あなたの　有能な　人の　**首が　吹っ飛ぶ**　なんて　我々の会社も　もう　終わり
ように　だね。

（あなたのように有能な人の首が切られるなんて我が社ももう終わりだね。）

3.0. まとめ

以上、「解雇」表現を中心に各々の意味変化のプロセスや多義性のメカニズムを観察した。本稿で示したように、各々の「中核概念」に光を当て、「容器のメタファー」(metáforas de recipiente) を始めとする比喩のフィルターを通すことで、次の（1）に示した 2 点の語彙学習指導が初めて可能になると言える：

（1） a. 種々の派生義が生じる意味変化のプロセスの概念的見地から解明

b. 本稿で取り上げたスペイン語表現の単一イメージによる効率的な体系化

また、こうして得られた概念体系は、学習者自らの自然な経験の相に沿った形で形成されているが故に、複数の単語を効率よく消化させることが可能となると考えられる。

主要参考文献

Chomsky, Norm（1957）*Syntactic Structures.* Studia memoriae Nicolai van Wijk dedicate Series minor 4. The Hague. Mouton.（勇康雄（訳）『文法の構造』研究社出版：東京.）

Cuenca, Maria Josep & Joseph Hilferty（1999）*Introducción a la Lingüística Cognitiva.* Madrid : Ariel Lingüística.

Lakoff, George & Mark Johnson（1980）*Metaphors We Live By.* Chicago : University of Chicago Press.（渡辺昇一（訳）（1986）『レトリックと人生』大修館：東京.）（Marín, Carmen González（trad.）（1986）*Metáforas de la Vida Cotidiana.* Madrid : Catedra.）

Lakoff, George & Mark Johnson (1999) *Philosophy in the Flesh : The Embodiment Mind and its Challenge to Western Thought.* New York : Basic Books.（計見一雄（訳）(2004)『肉中の哲学 — 肉体を具有したマインドが西洋の思考に挑戦する』哲学書房：東京.）

Real Academia Española (= RAE) (1999) *Grammática Descriptiva de La Lengua Española,* Tomo. 1-3, Madrid : Editorial Espasa Calpe.

Ungerer, Friedrich & Hans-Jörg Schmid (1996) *An Introduction to Cognitive Linguistics.* London: Longman.（池上嘉彦（他）(訳) (1998)『認知言語学入門』大修館書店：東京.）

上野景福 (1955)『語形成』(英文法シリーズ 25) 研究社：東京.

上野義和・森山智浩 (2004 – 2007)「イメージとカテゴリーによる語彙指導方法の構造改革（その 1 – 6）— 中学校・高等学校における和訳偏重主義への新提案 — 」『研究論叢』LXII – LXVIII 号．京都外国語大学国際言語平和研究所：京都.

上野義和・森山智浩・福森雅史・李潤玉 (2006)『英語教師のための効果的語彙指導法 — 認知言語学的アプローチ —』英宝社：東京.

高橋覚二 (2006)『もっと使える　基本のスペイン単語』白水社：東京.

竹内理（編）(2000)『認知的アプローチによる外国語教育』松柏社：東京.

福森雅史 (2007)『異言語間における動作主導入前置詞の概念研究 — スペイン語・ポルトガル語・英語を通して —』(大阪大學言語社會學會博士論文シリーズ Vol. 42) 大阪大学言語社会学会：大阪.

堀田彰 (1991)『人と思想 6　アリストテレス』清水書院：東京.

森山智浩・福森雅史 (2007)「英語前置詞 for, by とイスパニア語前置詞 por の概念メカニズムへの認知的アプローチ — 異言語研究と教育 — 」『日本認知言語学会論文集』第 7 巻．pp. 109-119. 日本認知言語学会：東京.

森山智浩・福森雅史・北野英敏 (2007)「異言語間における前置詞の意味変化と概念的メカニズムの認知言語学的研究」『太成学院大学紀要』第 9 巻（通号 26 号）pp. 189 - 197. 太成学院大学（旧 南大阪大学）：大阪.

［辞書］

Corominas ：Corominas, Joan & José A. Pascual (1980) *Diccionario Crítico Etimológico Castellano e Hispánico.* Madrid : Editorial Gredos.

新村出（編）(1998)『広辞苑』(第 5 版)，東京：岩波書店.

山田善郎（編）(2004)『現代スペイン語辞典』(改訂版)，白水社：東京.

片岡孝三郎 (1982)『ロマンス語語源辞典』(ロマンス語言語学叢書 V)，朝日出版社：東京.

田中秀雄（編）(1966)『羅和辞典』(増補新版)，研究社：東京.